

教育現場における家政教育の現状と課題（第1報）

－中学校教員の調査を通して－

○室 雅子* 飯塚和子* 高部和子** *お茶女大・院、**大妻女大

目的：家庭科の存在意義や目的が再認識される今日、これからの家庭科教育のために大学における家政教育も改善の必要があると考えられる。本研究では家庭科教員への調査を通して、過去にうけた家政教育歴と現場における教科運営の実状や教科内容に対する考えを明らかにする。また、この結果は、高校教員を対象とした第2報と合わせ、家庭科教員に必要とされる家政教育の改善点を探ることを目的としている。

方法：郵送による無記名自記式質問紙調査。調査時期は1998年6月～7月。調査対象は全国の公立中学校家庭科教員285名。有効回答数144名。（回収率50.5%）

結果：①大学では学習しなかったがもっと学びたかった項目として挙げられたのは、最近の社会問題でもある「環境問題」「消費者教育」「高齢者福祉」「情報処理」や「保育実習」などであった。②教えにくい教科内容は主に「家庭経営領域」に集中していた。その理由として「生徒の価値観に抵触する」という割合が高く、内容的に社会で必要とされながらも授業として展開しにくい実状が伺えた。生徒の生活実践の乏しさを指摘する意見も見られた。③教師は大学で調理・被服実習を経験した割合が非常に高いが、学習指導要領の改訂により被服製作が必修でなくなったこと等をうけて被服製作は約半数の学校で行われていなかった。大学での和服製作は不必要との意見も見られた。④家庭科は受験教科でないため、他教科から軽んじられているとする割合が高かった。一方で生徒の授業に対する積極性は比較的高いと教員は感じていた。⑤教員の出身学部は教員養成系(家庭)が約1/3、被服・食物が約1/4で他科は非常に少なかった。家庭科以外の免許保持者が4割以上いた。